利用者が主体となって学ぶ「展示環境」について (1)
―企画展『インカ帝国のルーツ　黄金の都シカン展』での展示改善の試みとふりかえり―

鈴　木　有　紀

1　はじめに

愛媛県美術館では、平成16年度に行った展示プログラムの評価[1]や、その後の取り組みから[2]博物館教育は「展示」がまず基本なのではないかという考えに至り、現在、常設の所蔵品展や企画展示の中で、利用者が主体となって学ぶ「展示環境」の在り方について探っている。

展覧会を訪れる利用者の行動を観察すると、展示室内に足を踏み入れた直後は、多くの利用者が期待と不安で緊張している。しかし展示室も中頃になると、次第に部屋の演出にも慣れ、展示構成もわかってくるようになり、作品や資料に落ち着いて向かえるようになってくる。リラックスしている時というのは知的好奇心が湧き易く、つまり利用者自身の「学び」の準備が整っている状態であることが多い。このような利用者の様子から、美術館では展示室の環境に利用者が慣れてくるタイミング・流れに添って、それぞれの「意志」で、みたいと思う展示の前に自由に行き来し、思考できるような展示環境を提供できないかと考えていた。

そうして今回、平成22年度に開催した企画展（巡回展示）『インカ帝国のルーツ　黄金の都シカン展』（資料1）において、本企画展の学術監修者である研究者、そして展示施工を務める展示デザイナーとともに若干ではあるが展示改善を行い展覧会運営を行うという機会を得た。

具体的には各巡回会場での利用者の行動や、展示をみた利用者の発言内容等を鑑みた上で、展示が単調にならない程度に展示室内が見渡せるようにしたり、最後の展示室から最初の展示室に気軽に戻れるような動線を作ったり、利用者の声をもとに新たな解説パネルの補充を行ったりと、「展示室の中を一方通行ではなく、利用者が行きつ、戻りつしながら自分の目で展示と向き合えること、シカン文化や考古学について考えることができる空間を創り出すこと」を試みた。

ここではこのシカン展の展示準備、及び開催中の「展示」の様子について報告するとともに、そこから考えられる次回の展示づくりへの課題について述べてみたい。

（資料１・シカン展印刷物）

2　企画展「インカ帝国のルーツ黄金の都シカン展」

(1)　展示概要

まず、企画展『インカ帝国のルーツ　黄金の都シカン展』（以下、シカン展）の概要について紹介する。シカン展は、2009年7月より国立科学博物館を皮切り

に、2011年5月にかけて全国巡回が行われた企画展で、愛媛会場では2010年11月17日㈬から2011年1月10日㈪の期間、開催された。

展覧会タイトルにもあるシカンとは、今から約1000年前に現在の南米はペルー共和国の北海岸地域に灌漑・金属加工技術・宗教を中心として栄えた宗教国家の命名である。[3]特に古代アンデス史の中でも飛躍的に発展・拡大を遂げた治金の技術は、後のインカ帝国にまで引き継がれて行く程、卓越したものであった。

（資料２・第一部「シカンを掘る！考古学の挑戦」の展示室）

（資料３・第二部「シカン文化の世界」の展示室）
※上下２枚とも

展覧会では、1978年からこの地の調査を開始してきた日本人考古学者・島田泉氏（米・南イリノイ大学）らシカン文化学術調査団と現地発掘調査隊が行った、30年間の考古学調査の過程と成果を紹介する「第一部・シカンを掘る！―考古学者の挑戦」（資料2）と、シカンの宗教・金属加工技術・黒色光沢土器の制作過程・社会構造や人々の生活等について紹介する「第二部・シカン文化の世界―インカ帝国の源流」（資料3）の二部構成により展示構成され、192件のシカン文化の考古遺物とともに、レプリカ、模型、各種解説パネル、音声ガイドそして随所にシカン文化を発掘の様子を紹介する映像展示が行われた。

⑵　各会場での展示の様子と利用者の様子

次に、各巡回会場での展示室の様子と、利用者の行動の様子について述べていく。

筆者はこのシカン展の展示準備・運営にあたり、2009年9月から始まった国立科学博物館での展示、次に2010年3月～４月にかけて開催された高知県立美術館での展示、そして最後に2010年8月～10月にかけて開催された鹿児島県歴史資料センター黎明館での計3回の展示見学に出かけた。

巡回展のメリットは、企画側も巡回会場側もひとつの会場が終了するごとに前の会場で得たことを参考にしながら次回に向けてより利用者にとって意味のある学びの場にして行けること、つまり展示改善を行えることである。今回のシカン展も実際に伺うことが出来たのは3会場のみではあったが、一回目よりは二回目、更に次へと会場ごとの物理的な制約はあるにしろ、作品や資料の展示配置・印刷物等、展覧会運営への改善の工夫が見てとれた。

しかしどこの会場においてもよく目にし気になったのが、展覧会の最終ゾーンに設けられた大画面シアター（資料4）によってシカン文化をおさらい的に紹介する映像を見終えた利用者の何人かは必ず、そのまま出口に向かうのではなく、考古学調査について紹介・展示を行った第一部の展示室もしくは第二部の展示室に逆戻りし、もう一度展示をじっくりみている姿であった。また本展覧会ではシカン文化の特徴である黒く

光る土器（黒色光沢土器）や、その他シカンの遺跡から出土した様々な形の土器等が数多く展示されていたため、展示室の中で、例えば友人どうしや家族連れの利用者が土器の形や使い方を説明したパネル等はなかったが、土器をテーマに楽しそうに会話をしている姿をどの会場でもよく見かけた。

（資料４･展示室最後に在る大画面による映像展示）
※写真は愛媛会場のもの

もちろんこれらの事前観察で展示室での全ての利用者の様子を観察出来たわけではない。しかし、このような各会場での利用者の行動・会話の様子を踏まえて、愛媛会場では次のような展示の改善と運営を行っていくことになった。

３　愛媛会場での展示改善

⑴　展示動線

まず、今回どうしても試みたかったのが展示導線の工夫である。冒頭でも述べたが、これまでの展覧会運営と利用者調査の分析等から利用者が展示環境に心身共に慣れてる頃には、ある程度展示室を見渡せ、利用者自身が展示室をコントロール出来ること―つまり「みたい展示」を自由に選択でき、展示物どうしの関連付けを行ったり新たな発見や疑問を感じたりと、じっくりと思考することが可能な展示空間を準備したいと考えていた。また、他会場において事前にシカン展を見学した際、その導線は一方通行となっていた。これでは途中で再度興味を持った展示を見たいと考えても、展示室が迷路のように入り組んでいたり、あるいは第一部と第二部の展示室が離れていたりと、気楽に引き返して展示を見直すには少し困難なように思われた（もちろんそのような中でも引き返したい利用者は、引き返していた）。また、個人的な感想ではあるが、見通しの利かない狭めの一方通行の展示室は落ち着かず、自然と行動が早目早目になってしまうように感じた。

このことは各会場の対応来館者数の違いや、物理的な事情もあるため一概に批判することはできない。しかし、展示室はモノを「みる」ための場所である。「みる」ということは、ただ漠然とそれを眺めるのではなく、そこに発見や驚きや疑問等の「思考」が伴うものである。そしてそれらが起こるタイミングも場所も利用者それぞれに自由である。展覧会担当者としては出来る限り利用者のペースで思考できる環境を準備したい。このような思いから愛媛での展示導線は、シカン展の担当展示デザイナーと話し合いを行いながら、計３回にわたり改善をしていくこととなった。（資料５・６・７）

今回のシカン展の動線を図面上で説明すると、まず図面左上部分の入口より展示室に入り、時計回りで展示室をぐるりと一周し、図面左下部分の出口から展示室を退室するという順序である。

第一回目の導線（資料5）では展示室の中盤部分、第二部の中頃あたりが、まだ一方通行の感が拭いきれていない。しかし、図面の左下部分、シカン文化発掘の様子の全容を紹介した大画面シアターの場所（最終ゾーン）から右上の方向に、第一部の展示室に再度簡単に戻ることの出来る導線をデザイナーの提案により付け加えた。これは各会場の展示室で、このシアターの場所からもう一度展示をみようと第一展示室へ逆戻りする利用者の姿を、デザイナー自身も何度も確認していたためである。

続いて第二回目の導線（資料6）を見ると、前回に比べ第二部の展示室の一方通行部分が解消されて来ている。しかし、大画面シアター左横、出口付近に設けられた「様々な科学技術を用いた考古学探査」について解説するパネル展示と、アンデスを代表する家畜「リャマやアルパカ」について紹介するパネル展示（アルパカの毛を触れるコーナーもあった）の位置が、この場所では利用者が活用し辛いのではないかと感じ

た。何故ここに展示を配置したかについては大画面シアターを利用者がより集中して見易い空間にするため、というデザイナーの配慮であったが、もう少しこのパネル展示の位置を利用者が活用し易いように変更したいと考えた。

愛媛県美術館の企画展では展示室内のみで展示を完結させず、度々展示室出口付近のスペースも模型やパネル等の展示として活用している。そこでデザイナーとの話し合いでは愛媛会場の利用者が、普段から自然にその場所を展示場所のひとつとして受け止めていること、そして大画面シアターの左横に配置するよりは利用者が展示を活用し易いこと、また大画面シアターを出口ぎりぎりに配置したとしても利用者の集中を妨げることにはあまりならないこと等を提案し、再度展示図面の改善を行った。そうして出来上がったのが第三回目の完成図面（資料7）である。

⑵　新規パネル

次に今回は新たな解説パネルを5つ追加した。（資料8～12）新規パネルの作成については、まずそもそも新しいパネルが必要なのかどうかから検討を行った。シカン展は普段当館で開催している展覧会に比べると、鑑賞を補助する解説パネルの量が多く、また文章量・内容とも利用者が読みやすくバランスがとれていたものであったため、そこに新たなパネルを追加することは利用者にとって煩雑になると思われた。

しかし冒頭でも述べたが、展示室で遺物をみた利用者どうしの会話が多く聞かれるにも関らず、その気づきや疑問を受け止め、サポートするものが少しではあるが足らないように感じていた。そこで、今一度既に作られている全ての解説パネルの内容に目を通し、内容が既存のものとなるべく重複しないよう、全体のバランスを考慮した上で、新たに5枚のパネル追加を行った。

パネルの作成にあたっては、展覧会監修者である島田泉、篠田謙一両氏に内容の相談・検討を行いながら進めていった。そうして対象は子どもと大人が共有できるものとし、字数は読むことが疲れない程度の400字以内、そしてこの解説パネルの中で、何かひとつの事実について伝えるという内容ではなく、なるべくもう一度展示物に目を向けたくなるようなもの、展示をみた利用者に対し「あなただったらどう思うか？」と利用者の考えを聴くようなものとした。

また途中、愛媛会場でチラシ・ポスター等の印刷物のデザインを務めたグラフィックデザイナーより監修者の島田泉氏がペルーからのエアメイルにて来場者に展覧会鑑賞を呼びかけるというものはどうか？という提案があり、利用者に対しても、より展示を具体的に感じられるものと考えたため展覧会冒頭部分に於いて加えることにした。（資料12）

⑶　その他

その他、今回は一般向けの展覧会チラシの作成の他に小中学生を対象にした展覧会チラシの作成を行った。（資料11・15※それぞれ表と裏）

この小中学生向けのチラシについては、一般向けのもの（シカン展の概要を紹介したチラシ）を所謂、子どもにもわかりやすく、というものではなく先ほどの解説パネルの時と同じく子どもも大人も共有できるものとした。そのため内容は利用者が会場を訪れた時に、シカン文化の様々な考古遺物がどのような経緯を経て、またどのような理由で展覧会が開催されているかを中心に作成した。

なお、この小中学生向けのチラシの「シカン大発掘すごろく」の部分ついては、展覧会会期中、拡大されたもの（人間がコマとなって楽しめるもの）を展示室入口前に設置し、展覧会を楽しむための一助とした。（資料15～19）

4　ふりかえりと次回の取り組みに向けて

最後に今回の試みのふりかえりと、次回への課題をあげて締めくくりとしたい。

まず今回の「展示導線の変更」等を始めとする展示づくりの試みについては、観覧後の追跡調査や展示室内での発話、利用者へのインタビュー等の調査を行っていないため、利用者の中に学びが起こっていたかどうかについてより詳細に判断するためのデータはない。しかし筆者や展示室内に常駐するスタッフの目視によ

る観察では、利用者の展示室内での平均滞在時間は約2時間であり（最も長い利用者で約5時間滞在した例もあった）、その間利用者は、最後の大画面シアターのある場所から第一部の展示室に気軽に戻れる順路を使い再度発掘調査の展示をみたり、見通しのよくきく各展示室の中を自らの興味・関心に応じて自由に行き来し、考えている様子をよく見かけた。（資料20）

（資料 20・最後の展示室と最初の展示室を行き来できる通路。写真は最初の展示室から通路を覗いたもの。画面奥に最後の展示室にあるシアターが見える）

また、頻繁に展示室内で受けた利用者からの意見や質問の数々も、その殆どが展示をよく見ていなければ（考えていなければ）発することが出来ない内容のものであり、このことから今回の試みはある程度効果があったのではないかと考えている。そして、もし利用者の中で何らかの学びが起こっていたとしたら、それは空間的なものだけではないことも、観覧後に良く聴かれた利用者からの声にみて取れた。

展覧会観覧後の利用者からは「シカンの考古遺物をじっくりとみることができ、大変興味深い時間を持てた。またその他にも今回の展示は、要所要所に発掘調査の詳細やシカン文化について紹介した映像が、適切な時間（2分30秒～3分程度の映像が4箇所）で配置されていて、それらがとても展示内容の理解に役立った。」（資料21）というものや、「展示の構成がわかりやすく、解説パネルの内容も丁寧で理解し易かった」という意見がよく聴かれ、展示室は空間的な環境だけでなく、内容的にもきちんとしたものが準備されなければならないということも、当たり前ではあるが改めて認識した。内容的にも空間的にも懐の深い展示は利用者に良い学びを起すことができる。

（資料 21・展示内容に対し、適切な時間・バランスで配置されていた映像展示）※上下２枚とも

しかし展覧会終了後、展示室での利用者とのやりとりや、展示鑑賞中の利用者の姿を再度ふりかえるに従い、展示室の中に展示をみた利用者の「お互いの考えを共有できる展示」、あるいは「場」を創る工夫が、今一度必要だったのではないかという考えが浮かび上がって来た。

今回の展覧会では本当に若干ではあるが、それまでの巡回会場で観察を行った利用者の声をもとに作成した新規パネルや、対話型鑑賞法によるギャラリートーク等、利用者どうしがお互いの考えを聴き、学びあうための教育プログラムは開催されていた。しかし、日々の展示室の中ではそのような「場」が極端に言えば全く無く、展示室に於いて筆者が利用者からの質問や感想等を受け、やりとりを重ねる度に、「私（利用者自身）は、この展示をみてシカン文化についてこれこれこういう風に考えるのだけれど、あなた、若しくは他の人の考えはどのようなものだろうか。知りたい。」というような趣旨の言葉をよく聴いた。シカン

展の展示の中には、例えば未だ解明されない埋葬方法や遺物のモチーフについて紹介する展示があった。しかし解説パネルはそれらの事実については伝えていたが、そこから喚起される利用者の考えを聴き、共有し、さらにその先へと考えを深めていくような「場」は準備されていなかった。

もちろん利用者は友人・家族どうしで、展示についてお互いに会話をしながら展示を楽しんでいた。しかし、そこに置かれた展示は「個々人々」が思考するには十分なきっかけを提供していたが、しかしまだそこで止まっており、そのもう一歩先へと動き出す―学びが拡がり継続して行くためには、今少し展示が一方通行であったのではないかと考えている。改善の余地はまだまだある。

人は「一人」では学べず、周囲の環境との関りの中でこそ学び、成長していくものである。[4]次回はそのような、展示室を訪れた利用者がお互いの思考を共有できる「場」を展示室に創り出したい。

今回の試みは、展示づくりの基本として、内容的にも誠実であり空間的にも利用者のペースでじっくりと思考できる展示環境を準備するということが、大切であることを教えてくれた。次回は、巡回展の最初の構想段階から展示づくりに関り、展示チームの中で協議を重ね、各会場ごとに担当者と話し合い、そして展示を訪れる利用者に学びながら、利用者にとってより良い学びの場となるための展示づくりに挑戦していきたいと考えている。

註

(1) ワークシート開発委員会編『平成18年度文化庁芸術拠点形成事業　博物館教育シンポジウム　ともに見る、ともに学ぶ　利用者との対話からはじまるプログラム～ワークシートを中心に～（報告書）』（2007、愛媛県美術館）

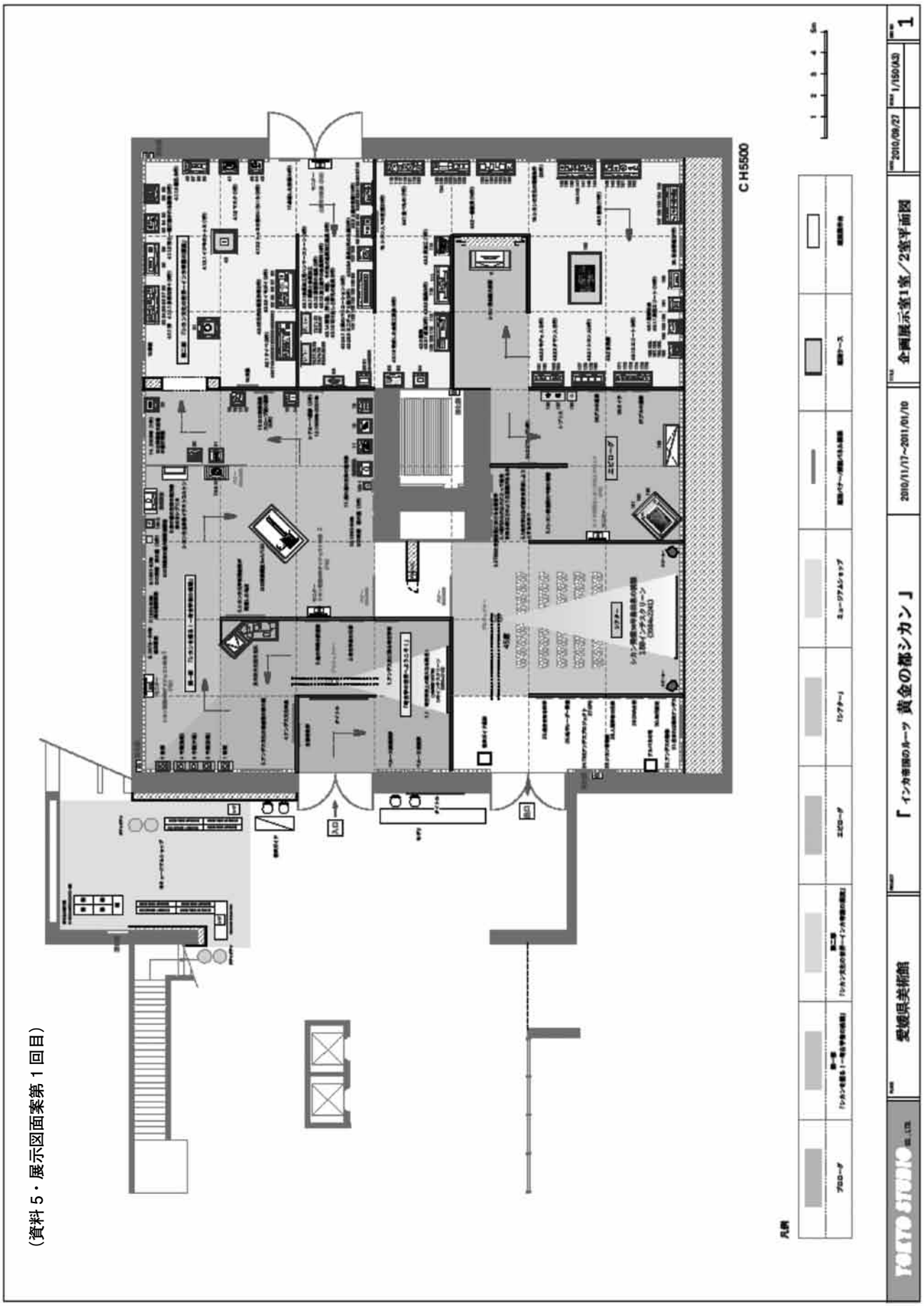
(2) 拙稿「「対話」に基づくワークシートプログラムの改善と実践について（報告）」『愛媛県美術館研究紀要』第8号（2009、愛媛県美術館）

(3) 「シカン」とは土着のムチク語（古代ペルー北海岸で使われ、19世紀に滅び去った文字のない言語）で「月（シ）の家、もしくは神殿」という意味を表し、島田泉氏によって名づけられた。スペイン殖民地時代の土地契約文書によると、神殿遺跡のある現在のポマ地区は「シカン」の名で知られ、この命名にはなるべくその文化に属していた人々の呼び方に忠実でありたいという島田氏の想いがこめられている。

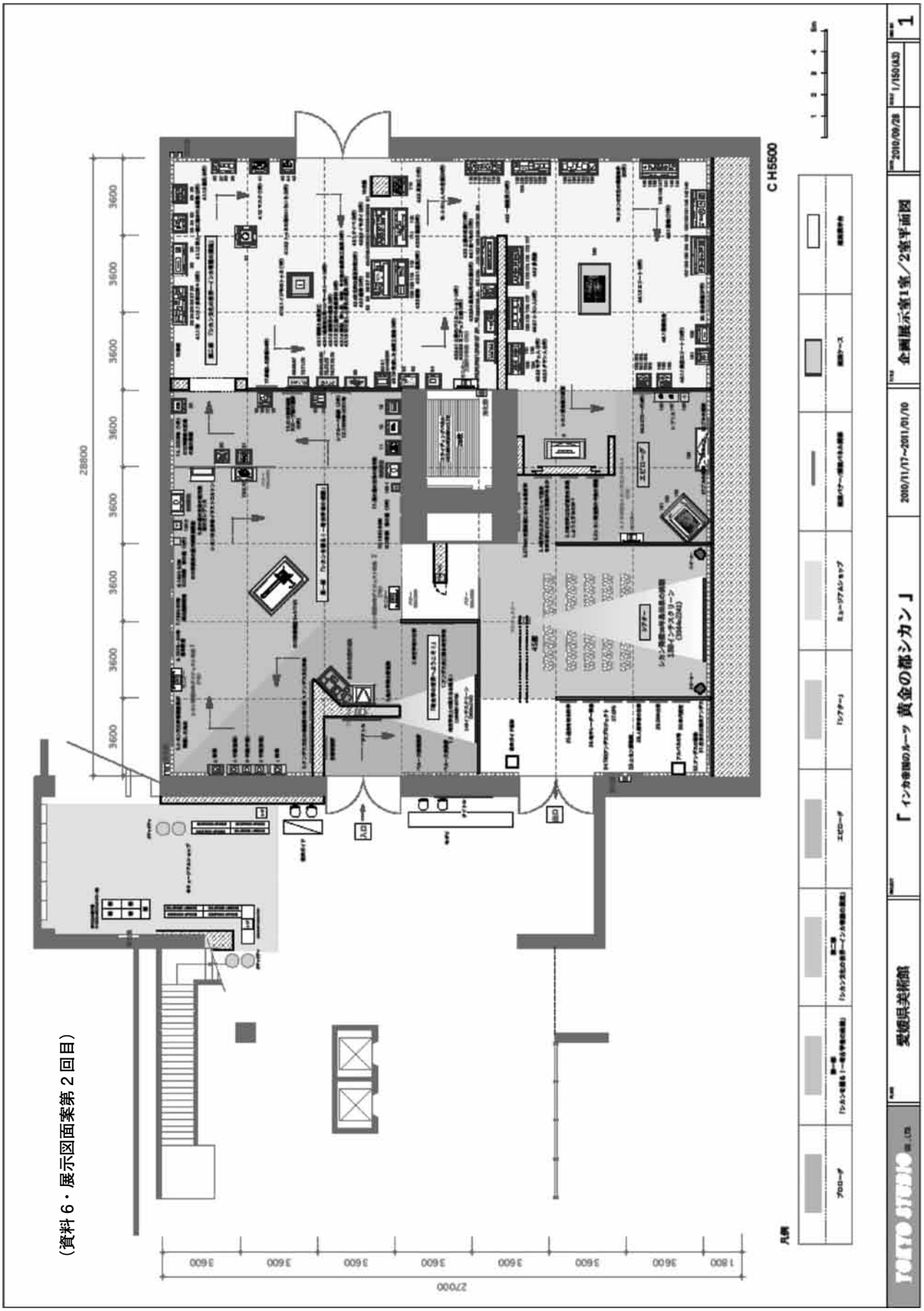
(4) 現在、アメリカの博物館教育を支える教育理論のひとつ「社会構成主義」の学習観。当館で実施している、対話による作品鑑賞も、この社会構成主義を基本理論として展開している。

謝辞

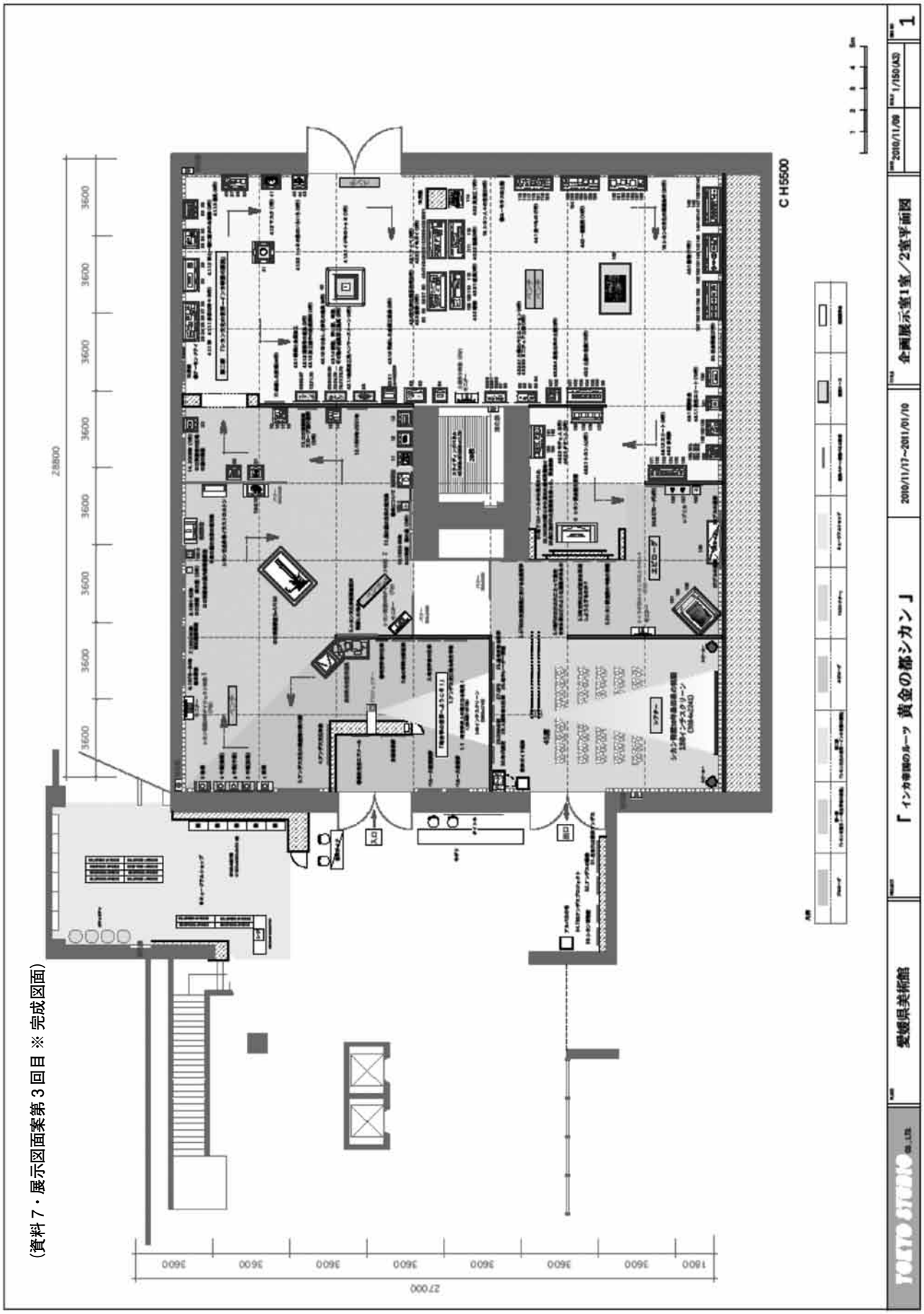
今回の展示改善の試みに際し、協力・助言を頂いた、本展学術監修者である米・南イリノイ大学教授・島田泉氏、国立科学博物館人類研究部人類史研究グループ長・篠田謙一氏、そして両氏との連絡・調整を行って頂いた本企画展制作元であるTBSプロデューサーの藤田和子氏、愛媛会場の展示環境づくりに関して、協力・助言を頂いた㈱東京スタデオ・展示デザイナーの吉野和彦氏、愛媛会場の展覧会印刷物のデザインを担当頂いたヒカリデザインの永木光氏、最後に本展覧会の準備・運営について何度も検討しながら協力・助言を受けた当館学芸員の田代亜矢子、ならびに展示室のスタッフのみなさんに対し、この場を借りまして心より御礼申し上げます。



（資料５・展示図面案第１回目）

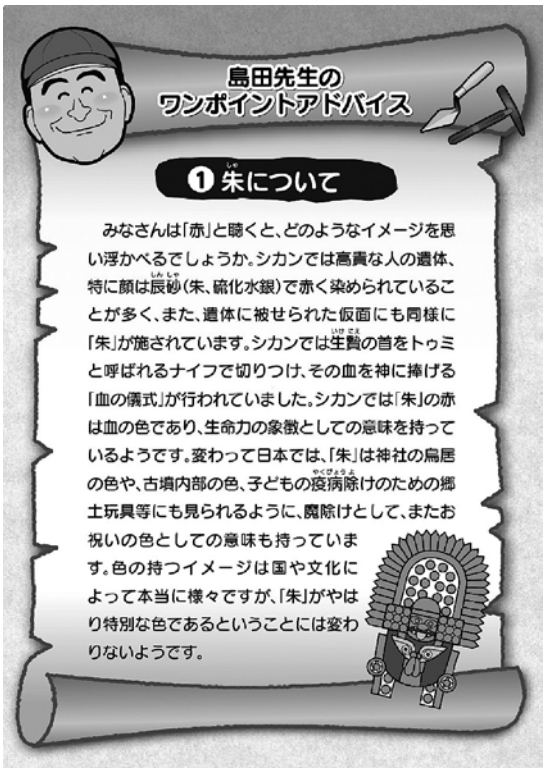


（資料６・展示図面案第２回目）

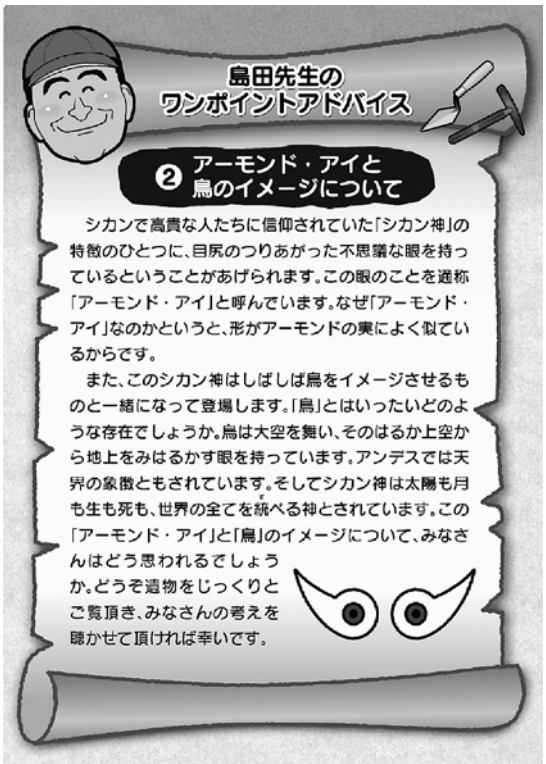


（資料７・展示図面案第３回目 ※ 完成図面）

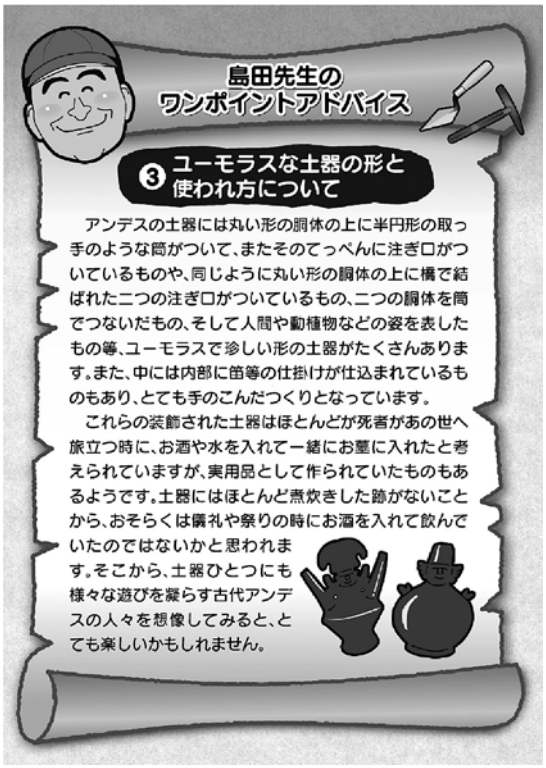
資料８～12（新規作成パネル）



（「資料８・「朱」について）

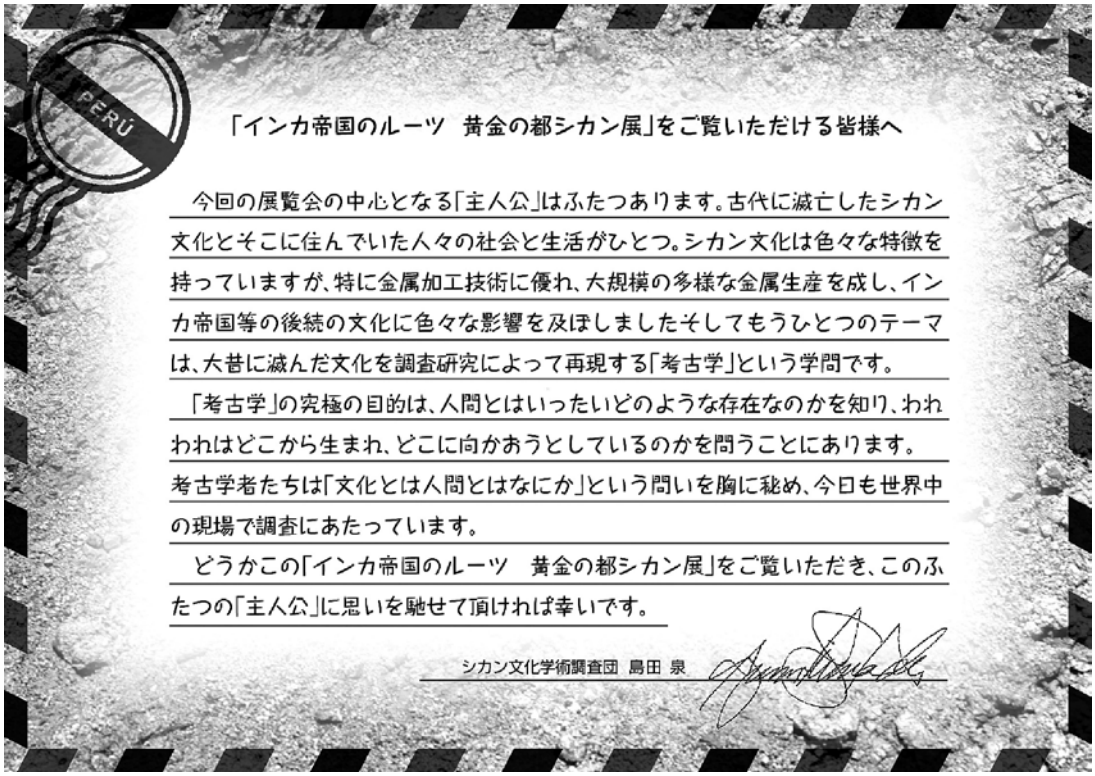


（資料９・「アーモンド・アイと鳥のイメージ」）



（資料 10・「ユーモラスな土器の形と使われ方」）

（資料 11・「考古学者の仕事」について）
※本パネルは小中学生用のチラシ表部分を再利用し、
下の黒帯部分を除いたものを掲示した。



PERÚ

「インカ帝国のルーツ　黄金の都シカン展」をご覧いただける皆様へ

今回の展覧会の中心となる「主人公」はふたつあります。古代に滅亡したシカン文化とそこに住んでいた人々の社会と生活がひとつ。シカン文化は色々な特徴を持っていますが、特に金属加工技術に優れ、大規模の多様な金属生産を成し、インカ帝国等の後続の文化に色々な影響を及ぼしましたそしてもうひとつのテーマは、大昔に滅んだ文化を調査研究によって再現する「考古学」という学問です。

「考古学」の究極の目的は、人間とはいったいどのような存在なのかを知り、われわれはどこから生まれ、どこに向かおうとしているのかを問うことにあります。考古学者たちは「文化とは人間とはなにか」という問いを胸に秘め、今日も世界中の現場で調査にあたっています。

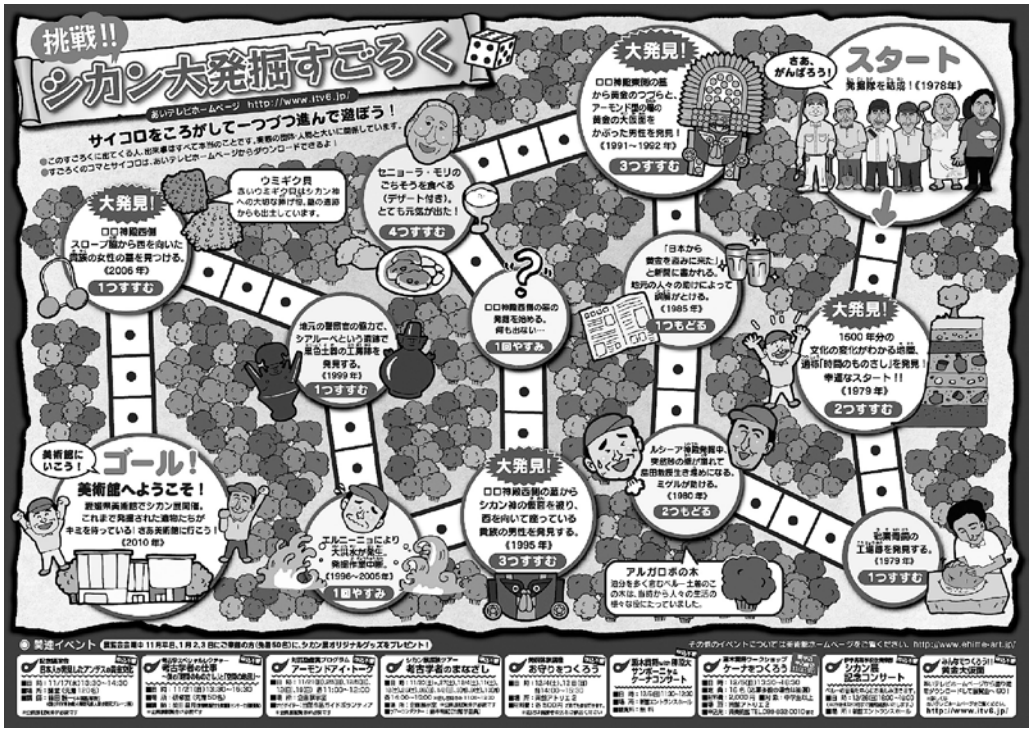
どうかこの「インカ帝国のルーツ　黄金の都シカン展」をご覧いただき、このふたつの「主人公」に思いを馳せて頂ければ幸いです。

シカン文化学術調査団　島田 泉

（資料 12・島田教授のエアメイルパネル）

（資料 13・島田教授のエアメイルパネル ※ 画面奥左）

（資料 14・考古学者の仕事パネル ※ 左から４番目）



（資料 15・小中学生対象に作成したチラシ裏部分）

（資料 16・展示室入口前のすごろく①）

（資料 17・展示室入口前のすごろく②）

（資料 18・すごろく利用の様子①）

（資料 19・すごろく利用の様子②）